
異説鬼退治?

Joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説鬼退治？

【Nコード】

N3670V

【作者名】

Joker

【あらすじ】

鬼が島？での鬼退治を終えた桃太郎たち。ある日、彼の家に突然の来訪者が現れました。白く美しい髪を持った美少女です。彼女の願いを聞き入れたセクハラジジイと桃太郎たちは彼女をしばらく預かることとなります。しかし、彼らは知りませんでした。彼女がどんな人間で、何故ここに来たのか。空前絶後の鬼が登場しない、鬼退治です。

異説鬼退治?? (前書き)

この物語は前作『異説鬼退治』の続編となっております。前作を読まれなくても、話は分かるようになっておりますが、前作をお読みいただき、登場人物の概要を知っておかれることをお勧めいたします。なお、前作には美少女は登場しません。あしからず。

異説鬼退治??

むかしむかし、あるところにお爺さんとお婆さんがいました。

お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。

お婆さんが洗濯をしていると、川上から桃太郎がどんぶらこ、どんぶらこと流れてきました。手には何故か盗撮用のカメラが右手には握られています。お爺さんから仕込まれたようですね。面倒くさいので、そのまま流しておいて家に帰ります。

家に帰ると小さな女の子が台所にいました。十歳くらいでしょうか。

「ぐえっへっへっへ、うちに何か用かい、お嬢ちゃん?」

お婆さんはよだれをたらしながら、その子を見下ろします。

今夜の鍋の具にでもしようとか考えています。

「私、迷子になったの。助けてください」

白銀の長い後ろ髪につけられた大きな白いリボンを揺らしながら、懇願します。

顔立ちは西洋人形のように整っており、世の男性全てを魅了するほどでした。印象的なのは紅色に染まった瞳です。身に付けている純白のドレスも彼女の美しさを際立たせています。

「うむ、めんこいから助けちゃる」

ということで、お婆さんは家でこの子を預かることにしました。

数時間すると、お爺さんが大きな桃を抱えて戻ってきました。

「婆さんや、隣村の金太郎さんの家からかつぱらってきたぞい!」

人はそれを窃盗と呼ぶのですが、お爺さんにそんな概念はありません。

「よつやった! 今日桃鍋じゃの」

というわけで、お婆さんは青龍円月刀を物置から取り出すと、思いつき振りかぶって、桃を叩き割りました。桃の斬り方が間違っているとか突っ込んではいけません。あらゆる常識は彼らの前では

紙切れ以下になるのですから。

なんと、中から出てきたのはサルのホームズです。かつて、桃太郎と共に株式会社鬼が島を倒しに行った仲間です。

「何でコイツがおんねん」

大阪弁です。お婆さんは刀を投げ捨てます。

「む、婆さん。あの炉理は誰じゃ？」

お爺さんの鼻息が荒くなったのは秘密です。

「この子は帰りに拾ってきたのじゃ」

「婆さんGJ！」

お爺さんはさらに鼻息を荒くして、女の子に近づきます。

「ハアハア」

どこからどう見ても変態です。

「近づかないで汚らわしい」

ばっさり。

「この爺とイイコトしようではないか」

「警察呼ぶわよ」

「おお、ツンデレか。愛いのお、愛いのお」

じりじりと女の子に歩み寄ると、桃太郎が金属バットで後ろからお爺さんをしばき倒しました。

「大丈夫？」

頭にはタコが乗っかっています。

女の子は変な少年を見つめました。別に一目ぼれしたとかじゃなく、『何この不思議な生物は？』くらいな目です。

桃太郎の後ろには下僕一号、犬のダイゴロウがいました。ダイゴロウの頭の上にはキジのポアロがいます。サルのホームズはみたらし団子を食べながらソファに寝転がって、テレビを見ています。

「ああ、はじめまして。僕は桃太郎。都立大江戸高校2年生です。こっちが犬のダイゴロウ、キジのポアロ。そしてあそこでみたらし団子を喉につめているアホはサルのホームズ」

てきぱきと自己紹介します。

女の子も

「よろしく」

とだけ返事をしました。表情は幾分か和らぎます。

「ワシのおにゃのこはどごじゃ」

よろよるとお爺さんが起き上がります。

「これ以上セクハラしたら、鬼が島？の座敷牢に放り込むからね」

桃太郎は脅し文句を吐きますが、そんなのどこ吹く風。

「セクハラのない人生なぞ、水のない海のようなものじゃ」

つまり、これはお爺さんの日常というわけですね。

女の子はじりじりと寄ってくるお爺さんを

『うざってえなこのクソジジイ』

的な目で見ています。

一方、お爺さんは内心

『このおにゃのこはワシに惚れておるなくふふ』

とか思っているのですが、悲しいカン違いです。

「ねえ、君の名前は？」

桃太郎はお爺さんと女の子の間に割って入りました。とりあえず、

このセクハラジジイをどっかに行かせなければなりません。教育上

よろしくありませんから。

「私の名前は……ないの」

悲しそうな声です。でも、鈴の鳴るような綺麗な声でした。

「じゃあ、僕たちがつけてあげようか」

と桃太郎の提案。

「テイラノサウルス！」

とお婆さんが開口一番叫びました。恐竜の名前を持ってくるあた

り、既に色んな意味で終わってます。

「お婆さん、可愛い女の子にそれはないでしょ」

「にゃにおう！？ ならば、ゴーヤチャンプルがいいのか?!」

駄目だコイツ早く何とかしないと。

「お婆さんには女心が分かってないでしょ？」

女の子そつちのけで口論です。

「あ、あの……」

あっけにとられている女の子。

「やかましい！ 動物保護団体を返り討ちにしたワシの女心はパ
ーフェクトじゃ！」

「どこが女じゃクソババア」

お爺さんが乱入します。が、乱入する場面を間違えたようです。

「ほう、死兆星を見たいようじゃな爺さんや」

お婆さんは太い縄をお爺さんの首にくくりつけます。そして、そ
れを持ってバイクにまたがりました。ペイントされた『極悪罵馬亜
連合』の文字が素敵です。どう見ても賊です。本当にありがとうご
ざいました。

「hんが；d hん；あb n d；bが」

お爺さんの言語化できない絶叫と共にお婆さんは走り去っていき
ました。名神高速を三百キロくらい逆走したら戻ってくるでしょう。
一連の出来事を女の子は見守っていました。怯えるでもなく、恐
れるでもなく

『コイツら絶対頭イカれてる』

くらいの目です。まあ、あながち間違っていますけどね。とい
うか大正解ですけどね。

「ごめんね、驚かせちゃって」

穏やかな声で桃太郎は言います。

「別に、優しくしてくれたって何とも思わないんだからね！」

このセリフで桃太郎は目を丸くしました。
しばらく頭を抱えた後

「うん、決まった。君の名前は『ツンデレラ』だ」

というわけで、ツンデレラと桃太郎たちの新しい日常が始まりま
した。

異説鬼退治??

お爺さんとお婆さんがテレビに映っています。何故かテレビカメラに向かつてダブルピースをキめています。無駄に目立ちたがり屋です。立場分かってるんだろうかと不安になりますが、これが日常茶飯事です。

『本日未明、名神高速を逆走した二名が逮捕されました。身元は不明、本人たちは「株式会社鬼が島取締役社長」と名乗っていますが、真偽のほどは』

テレビを消しました。

そしてため息。桃太郎は苦労人です。

台所ではツンデレラが朝ごはんの支度をしています。

何故こんなことになっているのかというと、昨晚にこんな出来事があつたからです。

ツンデレラにツンデレ属性が実装されると桃太郎は彼女に告げました。

というか最早これは一種の芸術です。加えて猫耳属性があれば萌え確定です。

「桃太郎お兄ちゃん、私別にツンデレなんかじゃないんだからね！」
「自分で釣るあたりが素敵です。それが萌えるんだよ、と桃太郎は思いました。」

勢いで彼女にピンクのエプロンをプレゼントします。

「物で釣ろうっていうの？ 私はそんな安い女じゃないのよ」

「そうじゃないんだ。ドレスが汚れたら困るだろう？ 着替えはないみないだし」

「桃太郎お兄ちゃんにしてはよく考えたじゃない。褒めてあげるわ」
小生意気なところもポイント高いです。

「あの変態ジジイの子どもにしてはまともなところもいいわ。お兄ちゃんが変態だったらグレネードをばらまいて当たり一面廃墟にしているところだから」

「いや、僕はお爺さんの子どもじゃないんだ。第一年齡差を考えたら、おかしいでしょ」

「養子なの？」

「それも正確には違うかな」

桃太郎はこれまでのいきさつを簡単に話します。自分は桃から生まれた桃太郎であること、鬼が島？に鬼退治に行ったが、それはジジイの謀略という勘違いであったことなどなど。

「あなたも苦労してるのね」

「もう慣れたよ」

「そのうちハゲるわね」

ツンデレラは数秒考えてから

「いいわ。私家事を手伝ってあげる」

とのたまいました。

ツンデレラの慈悲深い心に感謝です。

「別にお兄ちゃんのためじゃないんだからね。あのジジババから身を守るには一番都合がいいというだけなんだから。勘違いしないでよね」

脱獄してきたお爺さんはエプロンをして、料理に勤しむツンデレラを発見しました。彼女の横ではダイゴロウとポアロが手伝っています。

「おおおお、愛いのお、愛いのお」

もうデレデレです。鼻の下が二倍の長さになっています。

「近づかないで汚らわしい」

容赦ありません。

「あなたよりは犬とキジのほうが役立つわ。そこら辺に座ってなさ

い

「ぐふふ、爺が色々教えてあげようではないか」

「あら、お婆さん。この変態ジジイを何とかしてくれないかしら」
びくり。お爺さんの体が一瞬震えます。

「冗談よ」

ふふんと鼻を鳴らします。

フェイントです。

「ぐふふ、婆さんは今警官隊と銃撃戦を繰り広げておるところじゃ。二人で楽しい時間を過ごそうではないか」

お爺さんは鼻息を荒くしてツンデレラに飛び掛る準備をしています。

「あら、お婆さん。遅かったのね。このロリコンジジイを何とかしてくれないかしら」

「ぐへへ、もうその手にはのらぬぞ。さあ、爺の愛を……」

と言ったところで家のチャイムが鳴りました。

ピンポンと何度も鳴ります。ピンポンダッシュではなさそうです。

「あら、お客さんかしら。桃太郎お兄ちゃん、私行つて来るわね」

「なら、この爺も」

「お爺さんはこのみたらし団子を食べて休んでよ」

桃太郎はとっさの機転で紫色の泡を吹いているみたらし団子を渡します。サツマイモテイストで美味しいと説明も付け加えて。

みたらし団子を食べたお爺さんは一瞬びくんと跳ねた後で動かなくなりしました。

みたらし団子は暗殺用の武器。これは常識です。でも、良い子の皆は真似しないでくださいね。

お爺さんをとりあえず始末した桃太郎は玄関に向かいました。

そこには目の前の人物を見て、驚くツンデレラの姿があります。

「何故、あなたがここに……」

予期せぬ来訪者がそこにはいました。

異説鬼退治?? (後書き)

こんにちは。

第二話です。今回はギャグテイスト控えめ。

さて、最後に出てきた『予期せぬ来訪者』とは？

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3670v/>

異説鬼退治？

2011年8月8日03時36分発行